

サンクトペテルスブルグのアイヌ資料調査 2



(写真1)

1995年から千葉大学荻原眞子教授を代表として行われているロシアのサンクトペテルスブルグ市内の博物館収蔵のアイヌ関係資料の調査は、1996年も前年と同じく MAE（ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館：写真1）の収蔵資料について行われた。

1995年はピウスツキの収集した資料を中心として行い約1,100点を調査したが、今年の調査は昨年の調査からもれた資料及び、文書資料について2週間の調査、さらには MAE から交換資料として、ドイツにわたったピウスツキの収集資料についても、ライプチヒ州立民族学博物館で4日間の調査が行われた。

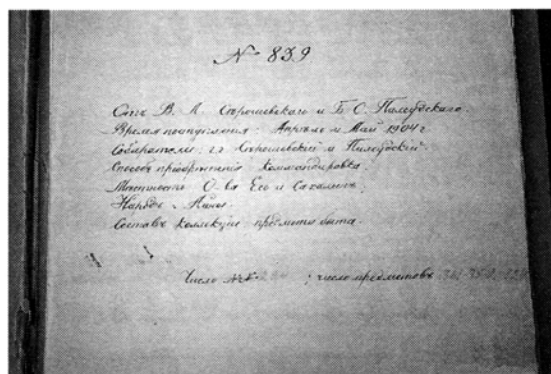
調査参加者は荻原眞子教授のほか、佐々木利和氏（東京国立博物館）中川裕氏（千葉大学）出利葉浩司氏（北海道開拓記念館）長谷部一弘氏（函館市博物館）内田祐一氏（帯広百年記念館）古原敏弘（当センター）の昨年からの調査者に、佐々木史郎氏（国立民族学博物館）が参加し、博物館に収蔵されている文書資料の調査を行った。

その結果、表1（2頁）のとおり MAE に収蔵さ

れているアイヌ資料は25コレクションからなりたっており、約880件、約1,400点のアイヌ民具資料が収蔵されていることが確認できた。

また、ライプチヒ州立民族学博物館においても約100点のピウスツキの収集資料を確認することができた。

MAE に収蔵されているアイヌ資料の大きな特徴として上げられるのはポーランドの民族学者ピウスツキの収集資料が飛び抜けて多いことである。彼は日本では蠟管^{ろうかん}レコードでアイヌ語やアイヌの音楽を記録したことでも知られるが、民具資料も多数収集したことは1995年の調査開始時点で判明しており、初年度の調査はその資料を中心に行ったほどである。調査を終了してみると、MAE のアイヌ民具資料の約8割はピウスツキが収集したものか、あるいは、



(写真2)

ピウスツキが同行して収集した資料であった。ライプチヒにわたってしまった資料も元々はここに含まれていたのであるからその割合はもっと高かったはずである。

コレクションナンバー「700」として登録されている資料は、サハリンの西海岸ホルムスク（旧真岡）での収集品、「829」は東海岸での収集品、「839」はセロシェフスキーと共に収集した北海道の収集品（写真2はその台帳）と、アイヌ文化の地域差を考慮に入れて北海道からサハリンにかけて広い地域で

収集した資料と考えられるものである。「837」、「2803」（タライカでの収集）「3125」もピウスツキの収集品であるが、貝や植物の標本が主であった。ピウスツキの収集品の特徴としては、日本にある資料のようにマキリやイクパスイのような骨董的に収集された資料が多数あるのではなく、生活用具や信仰具など、幅広く多くの種類を収集していることである。そのため、もし台帳の記載がなかったならば用途不明としなければならないものもあった。

現在、アイヌ関係資料は MAE のシベリア部門が管理している。これは、ロシアにおけるアイヌ関係資料の収集が、同国の東方進出にともなっていたことによっているのだろう。資料の中には北海道のものも多数あるように見受けられるが、主要なのはサハリンの資料である。北海道で収集された資料は、ピウスツキよりやや古い「345」とコレクションナンバーの付いた資料のみである。現在日本国内にはサハリンアイヌの資料は数が少なく、貴重な調査となった。

また、同じく日本国内には数の少ない古い時期の千島アイヌ関係の資料が収蔵されていることも特徴であろう。数的には多くはないが貴重な資料であり、今回の調査で千島の収集資料を確認できたことは重要な成果でもあった。



(写真3)

MAE では日本文化の展示室の一角にアイヌ文化を紹介する展示があり、写真パネル(昭和30年代か)と約20点ほどの資料がケースに展示されている。展示ケース内の人形に着せた衣服などは素晴らしい資料であったが(写真3)、取り外すことができないため詳しい調査はできなかった。

なお、他の部門の収蔵庫に素晴らしいアイヌ関係の資料約10点が納められているようであったが、実見することができなかったのは残念であった。

今回の調査では、約1,400点の資料について約900枚の調査票(サイズやスケッチを記入したカード)を作製し約8,000コマの写真撮影を行った。今後この資料を報告にまとめる作業にとりかかることになる。(古原)

(表1)

1997年3月の整理状況 (SPb-AINU PROJECT 公開研究会資料より)

コレクションNo	1995調査 件数	1995調査 点数	1996調査 件数	1996調査 点数	合計 件数	合計 点数	収 集 者
138	3	4			3	4	ポリヤコフ
178	1	2			1	2	シュレンク
202	19	26	4	8	23	34	スーブルネンコ
209	1	1	8	14	9	15	スーブルネンコ
345	18	27	12	18	30	45	グリゴリーエフ
482	2	2			2	2	ポシェット
615	1	1			1	1	地理学協会
629			1	1	1	1	
656	2	2	12	12	14	14	シュテルンベルグ
700	247	359	11	15	258	374	ピウスツキ
733			1	1	1	1	
809	11	40	7	26	18	66	ヴォズネセンスキー
810	2	2	1	1	3	3	海軍省
811	13	25	6	8	19	33	グリゴリーエフ
820	3	3	8	10	11	13	クンストカメラ
829	120	197	38	59	158	256	ピウスツキ
837	7	12	10	19	17	31	ピウスツキ
839	245	406	14	21	259	427	ピウスツキ/セロシェフスキー
1039			1	1	1	1	
1052	9	12			9	12	ポリヤコフ
2803	12	16			12	16	ピウスツキ
3125	7	7	8	9	15	16	ピウスツキ
4375	1	1			1	1	
4685	2	2	1	1	3	3	ダヴィドフ
4974	10	10			9	9	レーヴィン/ラヴロフ
小 計	736	1,157	143	224	879	1,381	

バラートシ・

アイヌコレクション展開催



(写真提供：帯広百年記念館)

1月16日から2月9日まで北海道開拓記念館（札幌市）において、3月1日から16日まで帯広百年記念館（帯広市）において「バラートシ・アイヌコレクション展 ヨーロッパからの里帰り」を開催しました。

資料はハンガリーの民族学者バラートシ・バログ・ベネデクが収集し、ブダペストの国立民族学博物館が所蔵しているもので、当センターが調査研究のために借り受けることになった約220点の中から生活民具や祭礼具などを中心に80点を公開しました。

札幌展では初日の1月16日、北海道開拓記念館城戸崎館長、ハンガリー国立民族学博物館のヴィルヘルム・ガボール氏、当センター所長谷本により、また、3月1日は帯広百年記念館に於いて帯広市長代理三神助役、北海道ウタリ協会笹村理事長、当センター所長谷本によるテープカットが行われました。



(ヴィルヘルム・ガボール氏)

(ホッパール・ミハイ氏)

1月19日には北海道開拓記念館との共催で講演会を開催しました。

当センターはハンガリーから2名の研究者を招聘いたしました。ハンガリー科学アカデミー民族学研究所教授ホッパール・ミハイ氏（写真右）は「バラートシの生涯と業績」と題して、バラートシの調査旅行や著作などについて講演されました。また、ハンガリー国立民族学博物館アジア研究部門主任研究員ヴィルヘルム・ガボール氏（写真左）には「ハンガリー国立民族学博物館のバラートシ・コレクション—アイヌとツングース—」と題して、主にバラートシが収集したアイヌ資料について、またその資料の大部分がブダペストの国立民族学博物館とドイツのハンブルグ市立民族学博物館に分散して収集された過程などについてお話いただきました。続いて当センター研究課古原課長が「バラートシ・アイヌコレクションについて」と題して、バラートシが来日した際の動きと、いくつかの展示資料の特徴についてスライドを使って解説を行いました。

その後、パネル・ディスカッション「これからのアイヌ民芸 ―伝統技術の継承と展開―」と題して、北海道開拓記念館学芸員・出利葉浩司氏の司会により、津田命子氏（北海道ウタリ協会・学芸員）、川上英幸氏（北海道ウタリ協会上士幌支部長）、内田祐一氏（帯広百年記念館・学芸員）、当センター研究課古原課長の四名がパネラーとして意見を述べました。

津田氏は、アイヌの女性が日常の生活用具を作る時の技術にはどんなものがあつたのかということを中心に、御自身の復元による民具についても説明をされました。続いて、古原課長は、アイヌ民具に関しては技術などが現在に伝わっていないものもあり、「復元」を常に頭において記録を取ることと、技術を身につけている人と協力することの重要性を指摘。川上氏は20年程前に「ある研究者との出会い」があつて以来、アイヌ文化の伝承や復元をするにあたり、研究者との共同作業を現在も続けられていますが、その範囲は食文化、生活用具やチセ（家）を建てるなど幅広く、地域のアイヌ文化の伝承について経験をふまえて話をされました。内田氏からはアイヌの民具を復元する際にはその材質や過程もまた記録する必要があるという点と、博物館側からの情報提供と復元する側の技術が必要であるとの指摘がありました。



(パネル・ディスカッション)

山田秀三文庫の整理作業 追記

前回のセンターだより第5号で、山田秀三文庫の映像資料「アイヌ伝承 カムイノミと踊り」の挿入文のうち数コマをご紹介します。挿入文の文字化のときに判読できなかった文字の部分を「□」で示しておきましたが、この不明部分やその他の部分の読みについて、さっそくある読者よりたいへん参考になるご見解を記されたお便りをいただきました。ご本人のご了承を得ましたのでここに紹介し、前号の報告に下記のとおり追記します。

- ・ 前号 p.2 第9コマ（カムイノミを唱える図）8行目「右手で高□のへりを」：「□」は「台」で、「高台^{こうだい}」かと思われます。「高台」とは「茶碗などの底につけられた脚部」（『広辞苑』第4版）のことです。
- ・ 前号 p.2 第16コマ（ハラルキ）2行目「折り□^{おりしき}して」：「□」は「敷」で、「折り敷」（折敷）かと思われます。「折敷」とは「（軍隊用語）右脚を折り曲げて尻の下に敷き、左膝を立てた身の構え」（前掲書）のことです。

また、いただいたご指摘をもとに、次のように考えることができました。

- ・ 前号 p.4 第16コマ（ホリッパ相の手）8行目「女の持物 □□ろ」：ホリッパの最中に入る掛け声や「テーヤン」という単語をめぐって、このお便りの後にもいろいろと調べたこととお知らせくださいました。それらを参考に再度画面を睨みますと、「□□ろ」はどうやら「^{たわ}撓めろ」ではないかと思われてきました。
- ・ 前号 p.4 第19コマ（チャッピーヤッ）10行目：「そのうえ」ではなく、「そろうと」ではないかとのご指摘でした。文脈やこの踊りの動きなどを考えますと、確かに「そろうと」の方が意味が通りそうです。（甲地）

ピパ (カワシンジュガイ) 本田 優子

1月、まだお正月気分が抜けない土曜の深夜、「探偵ナイトスクープ」という、お気楽なテレビ番組を見ていた。これまでのヒット作品がいくつか紹介されている中に「巨大シジミを追う」というのがあった。化け物のようなシジミを発見し、さんざん苦労して調理したが、実はそれはシジミなんかではなく「ドブガイ」だったというオチで笑わせるものだったが、レポーターのジミー大西の両手に余るその貝を見た瞬間、顔がこわばるのを感じた。

あれはまぎれもなく、去年と一昨年、平取のおばあちゃんたちや二風谷アイヌ語教室の高校生と共に新十津川の沼で採った「ピパ」ではないか。私は、今の今までそれを穀物の穂ちぎりを作る「カワシンジュガイ」だと信じ、高校生にもそう語っていた。おまけに、穂ちぎりの材料確保にと何個か持って帰り、二風谷の沼に放したりもした。たしかに考えてみれば、採れた貝はどれも巨大で、穂ちぎりとして使用すれば腱鞘炎をおこしかねない。けれど脳天気な私は、泥の中にはもっと手ごろな大きさの貝がいっぱい隠れているのだと信じていた。

いくつかの図鑑や百科事典でカワシンジュガイとドブガイについて調べてみた。それによると、カワシンジュガイは水のきれいな、比較的冷たい山間の溪流に生息し、道内では千歳の孵化場構内に多いとのこと。そういえば以前、二風谷アイヌ語教室で穂ちぎり作りの実習を行った時は、ウタリ協会千歳支部の方々が材料のピパを山ほど持ってきてくださった。その時、私自身は試食できなかったが、貝の中身の方もとっても美味なのだとお聞きした。だから「肉は硬く食用に適しないが、貝塚からも発見されることから、先住民族は食用にもしていたと思われる」(『北海道大百科事典』)という記述にはいささか首を傾げてしまう。一方、ドブガイは手近な図鑑に項目名としては載っていなかったが、ヌマガイとの

区別がはなはだ困難だと記されている。

この「ヌマガイ」という語が私を混乱させた。知里幸恵の『アイヌ神謡集』の中に、「沼貝が自ら歌った謡『トヌペカランラン』」という神謡があり、干上がったピパがオキキリムイの妹に助けられ、お礼に彼女の畑の穀物をよく実らせたというストーリーはよく知られている。また、この類話も知里真志保^{*1}を初め多くの人々によって「沼貝」の神謡として紹介されている。

ピパが沼貝で、しかもドブガイとヌマガイの区別が困難だというのなら、やはりあの巨大な貝はピパだったのではないのだろうか。

しかしその後、知里真志保の『分類アイヌ語辞典 動物編』や若月亨さんのピパに関する文章^{*2}にちゃんと目を通すことで、ようやく納得できた。川の氾濫などでできた沼にも、カワシンジュガイは生息している。水流がないため殻が薄くなってしまったそのようなピパを特別にトピパ(ト=沼、ピパ=カワシンジュガイ)と呼ぶこともあるらしい。つまり、神謡の中に登場するピパとは、あくまでも沼にいるカワシンジュガイのことであり、それを俗称で沼貝と呼んでいるにすぎない。一方ドブガイと似たヌマガイはれっきとした貝の学名である。私は“ぬまがい”という日本語の同一音に足をすくわれて、全く異なる二つの貝を混同しそうになったのだ。

もっともチェプという語に、「魚」と、その代表格である「鮭」という二つの意味が含まれるように、ピパが黒い色をした二枚貝の総称である可能性もあり、もう少し調べる必要はある。

それにしても、二風谷の沼の泥の中でうごめいているかもしれない巨大な貝を想う時、私は自分の勉強不足を恥じ、ひたすら泥にもぐりたくなる。

*1 知里真志保・小田邦雄『ユーカラ鑑賞』、1956年、元々社。川貝と沼貝の二つの類話が紹介されている。

*2 北海道教育委員会『オйна(神々の物語)1』、1990年、48頁、若月亨氏による訳註部。

平成8年度後半の主な動き

〔10月〕

- ・『センターだより第5号』発行
- ・平成8年度 第2回センター運営協議会
- ・幕別町蝦夷文化考古館文書資料調査（幕別町／協力：小川）

〔11月〕

- ・共同研究「カムチャッカ半島民族芸能調査／コリヤクとアリユート」（参加：谷本、甲地）

〔1月〕

- ・バラートシ・アイヌコレクション展（北海道開拓記念館）
- ・バラートシ・アイヌコレクション展記念講演会（北海道開拓記念館／講師：古原）
- ・平成8年度 第3回センター運営協議会
- ・第1回アイヌ民族の歴史研究の課題と方策に関する研究会

〔2月〕

- ・語学指導等を行う外国青年招致事業（講師：米田）
- ・幕別蝦夷文化考古館文書資料調査（幕別町／協力：小川）
- ・第2回アイヌ民族の歴史研究の課題と方策に関する研究会
- ・二風谷アイヌ文化博物館シンポジウム1997（参加：甲地、貝澤）

〔3月〕

- ・バラートシ・アイヌコレクション展（帯広百年記念館）
- ・平成8年度アイヌ文化講座（第2回道北地区博物館等連絡協議会研修会と共催）（留萌市／参加：古原）
- ・第3回アイヌ民族の歴史研究の課題と方策に関する研究会
- ・平成8年度在道都府県協議会職員研修会（講師：大谷）

- ・『センター研究紀要第3号』発行
- ・『山田秀三文庫音声・映像資料目録』発行
- ・アイヌ文化紹介小冊子『ポン・カンピソシ2（イミ・着る）』発行
- ・『センターだより第6号』発行

★お知らせ★

『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要第3号』を発行しました。以下にテーマと執筆者を紹介します。

- ◇論文 東京国立博物館のアイヌ民族資料（上）
佐々木利和
- ◇研究ノート アイヌ口承文芸にあらわれる植物および植物神について
本田優子
- ◇研究ノート 「貝澤こゆきのイヨハイオチシ」について
甲地利恵
- ◇調査報告 小川シゲノから上田トシへの伝承
大谷洋一
- ◇調査報告 本別コタンとサマイクルカムイのウチャシコマ
澤井春美
- ◇調査報告 沙流川筋中流域における、イナウに使用する樹木に関する報告（その2）
貝澤太一
- ◇資料紹介 江賀寅三関係資料：目録と紹介
小川正人
- ◇論文 アイヌ語静内方言の副助詞と終助詞
奥田統己

『研究紀要』と『山田秀三文庫 音声・映像資料目録』は北海道行政情報センター（道庁別館3階）にて有償頒布する予定です。

編集・発行 北海道立アイヌ民族文化研究センター
〒060 北海道札幌市中央区北1条西7丁目 プレスト1・7 5F
Tel. 011-272-8801(代) Fax. 011-272-8850
開館/月～金 9:00～17:00 休館/土・日・祝